

義則 ミヤの婚約者。

ミヤ 太郎の妹。

太郎 ミヤの兄。

マツ 喫茶店の人。

アヤ 太郎の妻。

トモ 骨折した人。

シゲ ミヤの友。

舞台は日本のような場所。

携帯という便利ツールが無い世界。あるのは古臭い黒電話。

家に居ないと遠方との連絡ツールは一つもない。

古臭い電話が舞台に一台。その中、もひときわ目立つ所謂「水槽」なるものが舞台上にある。

水槽には半分に満たない程度の水しか張られていない。

明転、一人太郎がボーっと水槽を眺めている。そこにマツがやってくる。

マツ どうかしたのかい。

太郎 ああ。今日はもう眠ったよ。

マツ そうか。よかった。

太郎 すまない。

マツ 僕、ずっと妹がほしかったんだ。違うよ。何かあったら、協力するから。

太郎 妹はやらん。けど、ありがとう。

マツ どういたしましたして。一本やるかい？

太郎 結構。

マツ そう。

太郎 むなしいよな。

マツ これ。

太郎 そう。

マツ なくなったら、もう一本吸えばいいのさ。

太郎 ミヤもそういうだろうな。

マツ そうだろうな。

太郎、手帳を開く。

マツ 式は？

太郎 あげないよ。

マツ そう。アヤさんは。

太郎 納得してくれてる。けど向こうの親がなあ。

マツ まあ、そのうちにさ。

太郎 そのうちにかあ。

マツ そのうちにだ。

太郎 いったらう。

マツ 協力は惜しまないよ。

太郎 ありがとう。

電話がかかる。

マツ そろそろ時間かあ。

太郎 そうだな。

マツ 手順は間違えるなよ。

マツ、バインダーに挟まれた紙(カルテ)を渡す。

太郎
マツ

すごいな、びっちり。
それも仕事だから。これで彼女も幸せなままだ。一切の不幸はない。

太郎、バインダーから紙のみを剥ぎ取り、バインダーを突き返す。

太郎
マツ

ありがとう。
僕もその方がうれしいんだ。

電話から遠ざかる二人。そこに急いでミヤが入ってくる。

ミヤ

はい。大丈夫です。今帰ってきました。また、行きたいですよ。もちろんです。
はい、おやすみなさい。はい。

ミヤ、電話を置く。

ミヤ

あしたは私の誕生日。一日早い誕生日祝いを大好きなあの人と過ごした。

太郎
マツ

あしたは日曜日、少し憂鬱な日曜日、またあさってから仕事だ。
毎日同じ作業をそつなく繰り返し返す。

トモ
シゲ

繰り返し返される毎日の中、道端の花に心を躍らせる。りんりんと。
鳴る電話を取る。

私が出る。

ミヤ
太郎

いや、私が、

マツ

いや、私が、

トモ

いやいや、私が、
私にかかってきたの。

ミヤ

何が？

全員

電話。

ミヤ
太郎

本当に。

シゲ

ええ。

ミヤ

本当。

太郎
マツ

本当。

太郎

本当は言わなきゃいけないって思ってたんだ。

マツ

嘘つき。

ミヤ

嘘よ。

太郎

大丈夫、兄ちゃんがついてる。

ミヤ

ありがとう。

アヤ

あたしの。

ミヤ

あたしの。

マツ

もう君のじゃない。

アヤ

もうあたしの。

ミヤ

あなただあれ。

アヤ

秘密。

マツ

後悔。

太郎

後悔。
なんだか眠たくなってきた。

シゲ

眠れればいいのよ。

ミヤ

ありがとう。眠るね。

シゲ

駄目。

ミヤ

うそつき。

アヤ

嘘なんかついてないわ。

シゲ 電話はいいの。
ミヤ そうだ、でなきや。

ミヤ、全員から邪魔されながら電話を取ろうとする。

アヤ ねえねえ。太郎さん。
太郎 なんだいアヤ。
アヤ 私、あなたに会えて本当によかったと思うわ。
太郎 僕も君に出会えてよかったと思う。
ミヤ どいて、どいて。電話に出ないと。
シゲ 誰も電話。
マツ かかるのは幸か不幸か。
シゲ 砂丘に文字を描く。
ミヤ どいて。
太郎 じゃあね。
アヤ またねって。
ミヤ どいて。どいて。
トモ はいどうぞ。

トモから受話器を渡される。

全員 それは何。
ミヤ 幸せに決まってるじゃない。
トモ 電話だよ。
ミヤ 電話だ。
アヤ うそつき。
ミヤ 言葉のアヤよ。
アヤ やつとこつち向いてくれた。
ミヤ 嘘をついたら。
マツ 針千本だよ。
太郎 飲むの。
アヤ 飲ませるの。
シゲ おぼれるほどに。
トモ おぼれたらやばいような。
太郎 遊戾坊、バースデイ公演。
マツ 培養魚。

く1ループく

暗転。明転するとそこは近所の喫茶店。太郎とミヤが話している。マツが経営している。

ミヤ そういうところ、仕事に軽薄だと思うのね。
太郎 うん。そうだね。
ミヤ お兄ちゃん。だから、私言っちゃったの。
太郎 うん。
ミヤ 聞いている？
マツ お水は？
太郎 いえ。
ミヤ 私貰おうかな。
マツ はいはい。

マツ、ミヤのコップに水を入れる。

ミヤ それでね、私言ってやったのよ。
太郎 お金をもらうってのはそういうことだ。

ミヤ そう。

太郎 はいはい。

ミヤ お兄ちゃん、聞いている？

太郎 聞いているよ、聞いているから答えてるんだろう。

ミヤ だってつまんなそうなんだもん。

太郎 何度目だ。

ミヤ そんなに話してないよ。

太郎 仏陀でさえ、3回なんだぞ。俺はなんて優しいんだ。

ミヤ そうね、お兄ちゃんは優しい。

太郎 で？

ミヤ ん？

太郎 俺はなんで呼び出されたんだよ。

ミヤ ……

太郎 おい。

ミヤ 心の準備つてのがあるのよ。

太郎 じゃあ、心の準備ができたらまた。

ミヤ わかった。言うから…やっぱりちよつと、

太郎 あのなあ。

ミヤ わかっている。わかっているの。お兄ちゃんは数少ないお休みの貴重な、それはそれは貴重な、大切な

太郎 時間をわざわざ、私のために裂いてくれている。

ミヤ そう。

太郎 でもね、これはすぐ言いにくいことなの。

ミヤ 借金。

太郎 違う。

ミヤ 病気。

太郎 ちがう。

ミヤ じゃあなんだよ。わざわざ呼び出してまで俺に話さなきゃいけない、それもこんなしみつたれた。…

太郎 ごめん、失礼。

ミヤ 事実だから。

太郎 そもそも、何かあっても電話で済むだろう。

ミヤ だって、お兄ちゃん帰ってくるの遅いから。いつ電話かけても出ないんだもの。

太郎 俺を呼び出すのに何使ったよ。

ミヤ ……電話。

太郎 そう。その時に電話で済む話だろ？

ミヤ なによ、お兄ちゃんかわいかわい妹に逢いたいと思わないわけ。

太郎 思うよ。思うけどさあ。

ミヤ けどなによ。

太郎 「お兄ちゃんに、大切な話があるの、とても、大切な話。」てなもんだから俺も相当覚悟決めてきて

ミヤ るの。わかる？すごい緊張してたのに。なかなか話さないもんだから。

太郎 だって。

ミヤ もういい加減話せば。

太郎 知ってる。

ミヤ 知っている。

太郎 帰る。

ミヤ まってまって。

太郎 赤の他人に話せて俺に話せないってなんだよ。お兄ちゃんショックだよ。

ミヤ 家族だからこそ、的なの。

太郎 なんだよそれ。

ミヤ 怒らないで。
太郎 怒るさ。そら。
マツ そら。怒るさ。
ミヤ 舞い上がっちゃって、マスターには話しちゃったのよ。
太郎 舞い上がったまま俺に真っ先に話せよ。
ミヤ お兄ちゃんは特別なの。
太郎 特別。
マツ 特別。
ミヤ とくべつ。
太郎 それなら、まあしようがないけど。
マツ わかりやすい。
ミヤ 驚かないでね。
太郎 おう。
ミヤ プロポーズされたの。
太郎 いつ。
ミヤ 一昨日の晩。
太郎 誰に。
ミヤ 木村義則。
太郎 それ、だれ。
ミヤ お医者さん。
太郎 医者。
ミヤ そう。
太郎 外科医。
ミヤ すごい。どうしてわかったの。
太郎 いや、わからない。そうなのかなって。
ミヤ あのね、かつこいいの。
太郎 へえ…。
ミヤ あれ、驚かないの。
太郎 驚いてる。驚いてるさそりや。
ミヤ 反応薄くない。
太郎 どうやって知り合うんだ。一体。
ミヤ ひかれたの。
太郎 どうやって。
ミヤ 車で。
太郎 ン。
ミヤ 義則さんの乗った車が駐車場で私にあたったの。
太郎 車に轢かれたのか。
ミヤ 轢かれたって言うてもあれ。駐車場だからそんなにスピード出でないし、轢かれたと言うよりも
ゆっくりコツンと。でね、その場で手当てしてもらって、病院にも連れてってもらって。どこもなんて
ともなかったのだけどね。
太郎 いや。
ミヤ 心配だからって家まで送ってもらって名刺貰って、
太郎 どれ。
ミヤ これ。
太郎 ミヤ。
ミヤ 電話したり、通院したり、そうしたりしてるうちに。そうなって。
太郎 どうなって。
ミヤ 大人だもの。そうなったの。
太郎 破廉恥。
マツ 子供じゃないんだから。
太郎 うるさい。
ミヤ でね、責任取るって。

マツ
いいよ。

太郎、立ち上がる。

マツ
行くのかい？
太郎
ああ。一度家に帰るよ。アヤがいるからね。
マツ
わかった。

太郎、捌ける。トモが反対方向から出てくる。

トモ
あのお。
マツ
どうしました。
トモ
さっきの、女の人。
マツ
ああ、
トモ
きれいですね。
マツ
え？
トモ
泣いてる女性はすてきなあと、思いませんか？先生。
マツ
はあ。で？
トモ
見とれて、ぼうつとしてて、足ぶつかって。
マツ
あ。
トモ
今度は僕が泣きそうです。
マツ
痛い。
トモ
熱持ってる？
マツ
はい、暑いです。やばいような感じですよ。
トモ
よし、すぐ見てもらおう。
マツ
はい。
トモ
車いすは。
マツ
ほしいです。熱いです。

マツ、トモ。捌けると同時にシゲが入ってくる。

シゲ
さむいな。
どうしてこんなに寒いのかな。冬だからかな。早く夏にならないかな。夏になればあったかいのにな。
でもこの周りは温かいな。ああ。駄目だ駄目だ。こんなに暖かいと眠っちゃうよ。このまま冬眠しちゃうよ。冬眠してみたあい。
ミヤ、登場。

ミヤ
できるもんならしてみなさい。
シゲ
無理無理。冬眠が永眠になっちゃうよ。お帰りなさい。
ミヤ
ただいま。
シゲ
ねえ。かっこいいの？
ミヤ
何が。
シゲ
婚約者。
ミヤ
かっこいい。
シゲ
いいなあ。僕もかわいい女の子の知り合いほしいなあ。
ミヤ
目の前にいるじゃない。
シゲ
見当たらない。
ミヤ
失礼なこと言うわね。
シゲ
それに無理だし。
ミヤ
輪をかけて。

シゲ だって結婚するんでしょ？
ミヤ そうね。そうなるといいんだけど。
シゲ どうしたの？

ミヤ お兄ちゃんに、駄目って言われちゃった。
シゲ 太郎に？

ミヤ そう、太郎に。

シゲ 僕が太郎をしかつたろう。ごめん。続けて。

ミヤ それに、怒ったから。

シゲ お兄ちゃんが？

ミヤ 私が。

シゲ どうして。

ミヤ 話すとき長くなりそうだから。話せないわ。

シゲ ミヤの話はいつも長いから慣れてるよ。それに僕眠たくならないし。あ。
ミヤ なに？

シゲ 最近眠たくなるんだよね。なんでだろう。

ミヤ 人は眠たくなって当たり前でしょう。

シゲ そうだよ。

ミヤ ああ。お兄ちゃんになんて謝ろうかなあ、

シゲ 怒ってごめんなさい。でもそれだけ義則さんを愛しているの。勿論お兄ちゃんも好きよ。
シゲ だから、私の愛している人をお兄ちゃんにも愛してほしいの。

ミヤ え？

シゲ どう。

ミヤ うん。悪くない。すごいわね。

シゲ 何が。

ミヤ 私、そのまま言おうと思ってた。

シゲ 当たった。

ミヤ そう。当たった。

シゲ ききーっ。どーん。車に。

ミヤ それはずいぶん前の話よ。あなたが家に来る前の話。

シゲ ここに来る前。

ミヤ そう。ここに来る前。

シゲ そんな昔の話忘れたよ。

ミヤ そう。そんな昔の話で怒るお兄ちゃんもお兄ちゃんだと思う。ねえ。
シゲ なに。

ミヤ あなたの話って聞いたことないわよね。

シゲ いいの。

ミヤ どうして。

シゲ 自分のこと話すのは苦手だから。聞き役がちょうどいいのさ。

ミヤ 私たち、相性いいのね。

シゲ けっこう。する。

ミヤ しない。

シゲ だよね。

ミヤ それに、無理だし。

シゲ うわあー。

シゲ、捌ける。

ミヤ あれ。シゲ。どこ？

シゲ、捌ける。

ミヤ あれ。シゲ。どこ？

シゲ、捌ける。

ミヤ あれ。シゲ。どこ？

シゲ、捌ける。

ミヤ、ゆっくりと水槽にエサを入れる。

シゲ 魚はいいなあ。悩みなんてないんだろうなあ。

シゲ

私は魚になりたい。そんな映画有った気がする。

ミヤ、電話をかける。どうやらつながらない。シゲゆっくりと出てくる。

シゲ だーれも電話。何でもない。続けて。

ミヤ、受話器を置く。

ミヤ お兄ちゃん。ごめんなさい。

太郎、出てくる。

太郎 ミヤ。

怒ってごめんなさい。でもそれだけ義則さんを愛しているの。勿論お兄ちゃんも好きよ。だから、私の愛している人をお兄ちゃんにも愛してほしいの。

俺の方こそ、本当にすまない。あれは、そういうつもりで言ったんじゃないんだ。わかってる。

そう。そうか。

それでね。お兄ちゃん。私、やっぱり。

とりあえず、会うだけ。それで手を打とう。もう。

頭ごなしに否定する事はやめたのだ。お兄ちゃん、少し進歩。な。

本当に少しだけね。でも、ありがとう。あつたらきつと否定したくなくなるわ。

そうかな。

だって、私が選んだ人だもの。

そうかもな。

うん。

どこ行くの。

トイ…、お花を詰みに。

太郎とシゲ二人きりになる。

おう。太郎。

シゲだったか。

そうだ。シゲだ。シゲキチだ。気に入ってる。

元気か？

まあまあ。

ミヤは知らない間に大人になってしまった。

そういうもんだよ。お兄さん。

太郎、手帳を開きながら深く息をつく。

幸せが逃げるぞ。

ああ。時間を巻き戻したい。

無茶な。

いつから俺はお兄ちゃんじゃなくなってしまったのだろう。

今もお兄ちゃんだ。

ちがう。ちがう。

ええ。

よし。

太郎、電話をかけようとする。

太郎 ああ！駄目だ！
シゲ なんだよもう。
太郎 もう、心臓が無くなってしまえばいいのに。

ミヤ、入ってきてる。

ミヤ ねえ。
太郎 わあ。
ミヤ 何よ。
太郎 考え事してたから。で。
ミヤ あしたの夜って時間ある？
太郎 うん。あるよ。仕事も

太郎、手帳を開きながら。

太郎 17時には終わる予定だから。
ミヤ そう、じゃあ明日にしましょう。
太郎 あした。
ミヤ うん。義則さんにご飯に行くの。そこに来てね。
太郎 あした。
ミヤ そうよ明日の18時半に駅の前で待ち合わせなの。車に乗ってね、夜景の素敵なところでご飯ですつて。

太郎 駅前で済ませたらダメなのか？
ミヤ どうして。折角夜景が見えるんだつたらそこにしましょうよ。
太郎 そうだな。
ミヤ じゃあ、早速。

ミヤ、電話を取る。

太郎 それじゃあ、明日18時に駅前で。
ミヤ うん。明日駅前で。
シゲ またな。
太郎 また、明日。

太郎退場。

ミヤ 義則さん。ミヤです。明日なんだけど、お兄ちゃんが会いたって言うてるのだけど。
そう、私の、実の。大丈夫かしら。本当。ありがとう。じゃあ。明日、駅の前で。めいっぱいおめかししなくちゃ。駄目よ、いつも通りなんて。特別な日はいつもと違うことをしなきゃ。
そういうものよ。女の子って。

ミヤが電話を置くや否や、翌日の喫茶店？になっている。客としてトモが座っている。

ミヤ それでね、義則さんてばいつも通りでも君はかわいいよだって。
マツ へえ。
ミヤ 言える？
マツ 言えないねえ。
ミヤ だから、結婚できないのよ。
マツ すまなかったね。

トモが近づいてくる。マツはそれに対してしっしつと追い払う。トモは一度捌ける。

ミヤ
なによ。

マツ
いや、虫がいたんだ。

ミヤ
飲食店でしょ。しっかりしなさいよ。

マツ
食はないよ。うちはコーヒーか紅茶だけ。

ミヤ
インスタントのね。

マツ
悪かったね。

ミヤ
よく採算取れるわねえ。こんなところで。

マツ
ちよつと。

ミヤ
どこ行くのよ。

マツ
トイレ。

マツ、捌ける。と同時にトモが戻ってくる。

トモ
立地はいいですからね。

ミヤ
あら、お客さんいたのね。

トモ
まあ、客って言うか、

ミヤ
このコーヒーどう思う？

トモ
薄い。

ミヤ
ね。

トモ
ねえ、おねえさん。

ミヤ
何？

トモ
初めまして。

ミヤ
ええ。初めまして。

トモ
僕、トモって言います。おねえさんは。

ミヤ
ミヤです。樋本ミヤ。どこかでお会いしました。

トモ
いや、初めましてです。

ミヤ
そう。

トモ
おねえさんてここにどれくらいいるの。

ミヤ
そうね、かれこれ2時間くらい。

トモ
え。

ミヤ
冷やかしてみたいなものよ。

トモ
昨日、泣いてましたよね？

ミヤ
え？

トモ
そこで。

ミヤ
あ、やだ、見られてた？

トモ
はい。

ミヤ
嘘つき。

トモ
え？

ミヤ
初めましてって。

トモ
話すのは初めてですから。

ミヤ
それで、ご用事は？

トモ
ああ。おねえさん。吊り橋効果って知っていますか。

ミヤ
ええ。

トモ
ぶつかったでしょう。入り口で。

ミヤ
確かに何かにぶつかったかも。

トモ
すごく痛かったです。

ミヤ
ぶつかったって言っても走っていたわけでもないし、コツン程度でしょう。

トモ
ええ。ここにコツン程度。

ミヤ
あら。

トモ
折れてるんですよええ。ここ。

トモ

ミヤ そうね。こうね。

ミヤ、合掌を組み替える。

ミヤ お兄ちゃんまだかなあ。

待ち遠しいかい。

18時に待ち合わせなのに。

あと30分あるよ。

でも遅いような気がするのよ。不思議ね。

それは不思議だ。どこ行くの。

ちよつと。

ミヤ、どこかへ行く。マツ、暫しひとり。

マツ 遅いな。

言うや否や、太郎がバタバタとやってくる。

太郎 お待たせ。

遅いよ。

すまない。仕事が大引いて、死んでいない親戚探すのに手間取って。

誰殺したの。

奥さん。

最悪だ。

だってほかに居なかったものしょうがないじゃない。

はどこ、いとこ、いくらでもでつち上げられるだろう。

お前は50人、はどこがいるのか。

いないけれど。

でもこれで何とか間に合ったのだ。

それにしたって奥さん殺す事ないだろう。

大丈夫ばれなきやいいんだ。

アヤ、ゆっくり出てくる。マツと会釈を交わす。太郎目をやるとアヤがいる。

太郎 ああつ。

私、死んだの？

いや、ちがう。ちがうのさ。

そうよね。

そうそう。

殺したのよね。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

しらないぞ。

お前からも何とか言ってくれ。そういうつもりじゃないんだって。

怒ってなんかないわよ。

そうなの。

どうしても、今日用事があったって仕方なくですもの。

そう。そうなんだよ。

じゃあ許してあげる。

ああ、アヤは優しいなあ。

どうしてもって時ですもの。私のお父様もお母様も使えないしね。

使ったのか。

先々週。

太郎

マツ

マツ それは怒っていいんじゃないかな。
アヤ 太郎さんの為だもの。怒らないわよ。
マツ 今日はどうして。
アヤ そうそう、これ。

アヤ、お弁当箱を出す。

アヤ 今日遅いんでしょう？夜ご飯、作ってきたから。
太郎 アヤ。
マツ 家でやってくれ。
アヤ 先生は誰かい人居ないの。
太郎 持つべきものは妻だぞ。
マツ 仕事が恋人。
アヤ だから結婚できないのよ。
マツ デジャブ。

ミヤの後ろをトモがついてきている。マツ、急いでトモの進行を止める。

ミヤ 遅かったね。
太郎 18時だろう何なら少し早いくらいさ。
アヤ ミヤさん。おひさしぶり。元気。
ミヤ じゃあ、駅に向かいますよ。
太郎 おい、まだ早いんじゃないか。
アヤ そうよ、少しお茶でも
ミヤ もし、もう着いていたらどうするのよ。恥かくのはお兄ちゃんだから。
アヤ そうね、ミヤさんの言うとおりに。
ミヤ ほら、早く。
アヤ ほら、早く。
太郎 ちよっと、まってって。
ミヤ 義則さんはもう待ってるから。

ミヤ、太郎の腕を引っ張って消えていく。

アヤ いったらつしやーい。
トモ 仲悪いんですか？
アヤ え？
トモ ミヤさんと
アヤ アヤです。
トモ アヤさん。
アヤ そんなことないわよ。いつもお話ししてるもの。
トモ いや、
マツ 君ねえ。
トモ どう見たって無視されてるじゃないですか。
アヤ 君、いくつ。
トモ 24です。
アヤ だからわからないのよ。
トモ いくつ。
アヤ 女性に年齢聞くのはマナー違反よ。
トモ ええ。
アヤ でも特別に。22才。
トモ 俺より若いじゃないか。
アヤ 男の子より女の子の方が年取るの早いよ。あなたみたいなお子様と一緒にしないで。くそガキ。

トモ　なんだコイツ。
アヤ　さつきも教えたけど私はアヤ。
マツ　うるさい。ここをどこだと思ってるんだ。君は早く部屋に戻るんだ。そろそろご飯が運ばれてくるから。
トモ　はい。

アヤ、トモの松葉づえを片方奪う。

トモ　返せよ。
アヤ　訂正して頂戴。
トモ　それないやばいよう。
アヤ　私はミヤさんに無視なんかされてないわ。無視されてないって訂正しなさい。今すぐ。ほら。早く。アヤさん。

マツ、アヤから松葉づえを奪い返す。

マツ　トモ君だったね。すまない。彼女には僕からしつかり言っておくから。
トモ　アンタらいったい何してるんだ。
マツ　すまない。今日のところはこれで。

マツ、財布からお札を取りだし渡す。

トモ　え。
マツ　良いから、早く。

トモ、無言でポケットにお札を突っ込み、しぶしぶ部屋からいなくなる。
お弁当は置きっぱなしになっている。

マツ　アヤさん。
アヤ　ごめんなさい。
マツ　いや、怒ってるわけじゃないんだ。
アヤ　本当にごめんなさい。
マツ　足折れてる人の松葉づえは取ったらだめだよ。
アヤ　つい。あ…。

アヤ、置き去りになったお弁当箱を見つける。

マツ　ああ。
アヤ　…。
マツ　僕が渡しておくよ。
アヤ　いえ、私持っていくます。

アヤ、捌けていく。

マツ　アヤさん。
マツ、アヤを追いかけて捌ける。

ミヤ　どうしたのかしら。
太郎　知るかあ。約束すっぽかすなんてやっぱりろくでもない、なんでもない。
ミヤ　もとはと言えはお兄ちゃんが遅れるから。
太郎　約束の場所については18時びったりじゃないか。

シゲ そうだそうだ。
ミヤ ちよこつと遅れたぐらいで。
太郎 ちよこつとつて。
シゲ そうだそうだ。
ミヤ でも、おかしいわ。
シゲ なにが？
ミヤ 義則さん、絶対に15分前には居るもの。
太郎 今日で絶対じゃなくなつたな。
ミヤ もう。
太郎 もしかして俺が怖くて怖気づいたのか。
ミヤ そんなことあるわけないじゃない。
太郎 いいや。俺の愛の深さにおじけづいたのさ。
ミヤ お兄ちゃん。
太郎 …。せっかく仕事を切り上げてきたのに。踏んだり蹴ったりだ。
ミヤ それは、ごめんね、お兄ちゃん。
太郎 お仕事、忙しい方なんだろう。またの機会にしよう。
ミヤ うん。ご飯は…。

太郎、手元に弁当箱が無い。

太郎 どうしよう。
シゲ 食べる。
太郎 どうしようかな。
ミヤ 焼き魚でいい。
シゲ 麻婆豆腐。
太郎 いや、帰ってから食べるよ。
ミヤ あら、そう。
太郎 じゃあ、帰ろうかな。
ミヤ え、もう？
太郎 ああ、最近眠れなくてね。
ミヤ そうなの。本当にごめんなさい。
太郎 何が？
ミヤ その、忙しいのに。
太郎 いいんだよ。
ミヤ でも。
太郎 かわいい妹の為だ。兄ちゃんはどうな事だつてするさ。どんなことだつて。
シゲ ありがたい。
シゲ 電話が鳴るよ！

黒電話が鳴る。

ミヤ すごい。義則さんかしら。
太郎 じゃあ、俺帰るな。

アヤ、お弁当箱を持って入ってくる。

アヤ 太郎さん。お弁当。
太郎 なんて。

太郎。アヤの耳をふさぐ。お弁当箱が地面に落ちる。

ミヤ はい。ええそうです…。嘘。そんな。だって昨日まで。昨日までこの電話で話してたんですよ。

シゲ
ミヤ

義則さんに代わってください。早く。私は冷静です。冷静な人間は冷静だって自分で言うものです。だから私はいたって普通で大丈夫なんです。だから早く代ってください。義則さんは死んでなんかいないもの。私は大丈夫。大丈夫なんです。そうだとおもう。

はい。大丈夫です。今帰ってきました。また、行きたいですよ。もちろんです。はい、おやすみなさい。はい。

ミヤ、一度電話を置く。かけなおす。

よし、帰ろう。

太郎さん。お弁当届けに来ただけなの。

帰ろう。

怒ってる。太郎さん怒ってる。

帰ろう。

太郎、先に掛ける。アヤ、落としたお弁当を抱きしめて、帰る。

ミヤは、再び取り上げ電話をかける。

やっほー、お兄ちゃん。うん。元気だよ。ねえ。明日って時間あるかな。うん。できれば夜遅くない方がいいかな。お兄ちゃんに、大切な話があるの、とても、大切な話。お仕事何時に終わるの。わかった。じゃあ、18時に喫茶店で。うん。先に入って待ってるから。ばいばい。

ミヤ、電話を置く。

ミヤ
シゲ
シゲ
シゲ
シゲ
シゲ
シゲ
シゲ
シゲ
ミヤ

お兄ちゃん驚くだろうなあ。

おどろくだろうね。

いつからいたの。

やっほーから。

あのね、

うん。言わない。秘密でしょ

わかってるならいいの。秘密。

ミヤ、掛ける。

良いね、秘密。

シゲ掛ける。と同時におそらく。アヤと太郎の部屋。

秘密にするから。

なんで来たんだ。

お弁当、ロビーに忘れたから、それを。

そんなこと。

だって、おなかせいて太郎さん死んじゃったら、私。

大丈夫だ。俺は死なない。

そうね、死んだのは義則さんよね。

アヤ。

聞こえちゃったんだもの。太郎さんの手を通じて。

絶対に誰にも言わないでくれ。

大丈夫よ。私たち二人きりだもの。

誰にも、先生にも。

勿論よ。だから怒らないで太郎さん。これは私たちの秘密。

そう、秘密なんだ。

太郎
アヤ

アヤ 私と太郎さんだけの秘密、でしょう？
太郎 そうだ。先生も知らない。俺と、アヤだけの秘密なんだ。
アヤ そう。うれしい。
太郎 絶対に。
アヤ 大丈夫よ。私、秘密も守れるって誓えるもの。
太郎 も。
アヤ 太郎さんへの永遠の愛も誓えるもの。
太郎 アヤは頼れるなあ。
アヤ それは嫌。
太郎 え。
アヤ 何でもない。ねえ明日はどこに行くの。
太郎 明日は、病院に。
アヤ また
太郎 大丈夫、すぐ帰るから。
アヤ

アヤ、太郎の手を握る。

アヤ 太郎さん、私すごくさみしいの。
太郎 少しだけだから。
アヤ 太郎さんを太郎さんと呼ぶのは私だけでしよう。
太郎 そうだね。
アヤ それだけさみしいことなの。
太郎 でも行かなきゃ。
アヤ じゃあ、私の秘密も教えるから。
太郎 駄目だよ。秘密は教えたら秘密じゃなくなってしまうもの。
アヤ 秘密じゃないの。ミヤちゃんは。
太郎 それは秘密だ。特別な秘密。
アヤ 特別。
太郎 な、秘密だ。
アヤ 私は？
太郎 え？
アヤ 私はどんな秘密なの。
太郎 アヤは秘密なもんか、どこに出しても恥ずかしくない俺の奥さんだ。
アヤ じゃあ。私はどこに出しても恥ずかしくない公開。
太郎 後悔。
アヤ 秘密の反対。
太郎 君は後悔なんかじゃないよう。僕の奥さんなんだから。大切な。
アヤ わたしは大切なのね。
太郎 そうだよ。大切だ。
アヤ うん。大切な秘密ね。
太郎 それでいいよ。
アヤ 太郎さん。
太郎 なんだい。
アヤ おやすみなさい。
太郎 じゃあね。
アヤ や。
太郎 …。
アヤ また明日って。
太郎 そうだね、また明日。
アヤ

太郎。捌ける。アヤ、一人ぼっち。

アヤ 大切な秘密。後悔じゃなくて、大切な秘密。秘密。

〜2ループ目〜

トモ そう、秘密。

トモ そんなものないよ。

トモ とぼけたたつて駄目さ。おかしいよ、どう見たって無視されてたもの昨日のあれは。君からしたらそうなのかもしれないね。

トモ 誰からしてもそうさ。なあ。誰にも言わないからさ。駄目。

トモ じゃああるんだ。秘密。

マツ : 誰にでもあるだろうそんなもの。

マツ 俺にはないよ、秘密。体重から結構。

トモ 今日は、ミヤさん来るのかな。

マツ 来ないよ。

トモ じゃあ待つ。

マツ 待つな。

トモ じゃあくるんだ。ミヤさん。

マツ …。

太郎 太郎入ってくる。

マツ 早いじゃないか。

太郎 ああ、昨日アヤを殺したことにしたから、今日は休みになってね。

マツ そうか。

太郎 コーヒーくれ。

マツ はいはい。

マツ、コーヒーを出す準備。

マツ 疲れてるな。

太郎 昨日も寝過ぎしたからな。寝不足なのかもしれない。

マツ これ。

太郎 なんだこれ。

マツ ただのビタミン剤だ。効くぞ。一回一錠。

太郎 ありがたくもらうよ。一回、一錠。

マツ 寝る前にな。

太郎 あぶないな、飲むところだった。

トモ ああ、すまん。

太郎 なんだい。じつと見て。

トモ お兄さん、名前は。

太郎 樋本 太郎。

トモ ひのもと。

太郎 なんだ。

マツ なんだ。

太郎 先に居ていいのか？

マツ 大丈夫。来る前には帰るさ。

太郎 最近早いからさ。

マツ 大丈夫さ。

太郎 君の大丈夫は信用ならないからな。

マツ …。

太郎 なんだと。
トモ 友達。
マツ 家族みたいなものさ。
太郎 そんな、そんなものか。
トモ お兄さんは秘密教えてくれますか。
太郎 へ？
トモ あるんだ、秘密。
太郎 ひみつなんてないよ。なあ。
マツ わかりやすいな。
太郎 褒めてない。
マツ え。
トモ デジャブ。
太郎 お前なんか話したのか。
マツ 僕が、話すわけがないだろう。
太郎 それもそうか。引つかからないぞ。絶対に秘密は言わない。
トモ あるんだ秘密。
太郎 あっ。…ないないないない。ああっ。

ミヤ、入ってくる。太郎は急いで紙を取り出して平静を装いながらシーンを進行する。
ミヤ あれ。早いね。
太郎 おう。
マツ いらっしやい何にしようか。
ミヤ 紅茶。
マツ うん。
トモ ミヤさん。
ミヤ どこかでお会いしましたか…。
マツ え。
トモ 昨日お話したじゃないですか。
マツ 新しいバイトだよ。覚えてあげて。
ミヤ よろしく。
トモ いや、
マツ ほら、こつち。
マツ、トモを引つ張って移動する。

トモ ミヤさん、
マツ 太郎、ほら。
太郎 ミヤ。それで、話して。
ミヤ ああ、あのね。
太郎 うん。
ミヤ 職場にみんなから嫌われてる上司がいてね。
太郎 うん。
ミヤ そいつが休憩時間でもないのにタバコ吸いに行ってたの。毎日。毎日よ。
太郎 それで。
ミヤ だから私、言ってやったのよ「今お給料もらいながらたばこすってますよね」って。
太郎 …。
ミヤ そしたらなんていったと思う。「仕事でたまったストレス仕事中に発散して何が悪い。」って。
太郎 だから、私こうも言ってやったの。「お金をもらうってのはそういうことだ。」って。
ミヤ …。
太郎 それでね、私言ってやったのよ。

太郎 お金をもらうってのはそういうことだ。

ミヤ そう。

太郎 うん。

ミヤ お兄ちゃん、聞いている？

太郎 聞いているよ、聞いているから答えてるんだらう。

ミヤ だってつまんなそうなんだもん。

太郎 そりゃそうさ。何回目だ。

ミヤ 初めてだよ。

太郎 何度も。

マツ え？

太郎 このあいだも聞いたぞ。

ミヤ 前にも話してたっけ。

太郎 仏陀でさえ、3回なんだぞ。

ミヤ そうね、お兄ちゃんは優しい。

太郎 俺はなんで呼び出されたんだよ。

ミヤ 心の準備ってのがあるのよ。

太郎 じゃあ、心の準備ができたらまた。

ミヤ わかっている。わかっているの。お兄ちゃんは数少ないお休みの貴重な、それはそれは貴重な、大切な

太郎 時間をわざわざ、私のために裂いてくれている。

ミヤ そう。

太郎 でもね、これはすごく言いにくいことなの

太郎 「お兄ちゃんに、大切な話があるの、とても、大切な話。」てなもんだから俺も相当覚悟決めてきて

ミヤ のの。わかる？すごい緊張してたのに。なかなか話さないもんだから。

太郎 プロポーズされたの。

ミヤ いつ。

太郎 一昨日の晩。

ミヤ 誰に。

太郎 木村義則。

ミヤ それ、だれ。

太郎 外科医。あのね、かつこいいの。

ミヤ へえ…。

太郎 あれ、驚かないの。

ミヤ 驚いているさ、そりゃ。

太郎 反応薄くない。

ミヤ どうやって知り合うんだ。一体。

太郎 ひかれたの。

ミヤ 車で。

太郎 そう轢かれたって言うってもあれ。駐車場だからそんなにスピード出でないし、轢かれたと言うよりも

ミヤ ゆっくりコツンと。でね、その場で手当てしてもらって、病院にも連れてってもらって。どこもなんて

太郎 ともなかつたのだけだね。心配だからって家まで送ってもらって名刺貰って、

ミヤ どれ。

太郎 これ。電話したり、通院したり、そうしたりしてるうちに。そうなって。

ミヤ どうなって。

太郎 大人だもの。そうなったの。

ミヤ 破廉恥。

太郎 でね、責任取るって。

ミヤ じゃあ。

太郎 いやね。できてはいないわよ。

ミヤ ほっ。

太郎 お兄ちゃんに紹介しようと思つて。どう。誠実だし、将来性あるし。

ミヤ それでいて、私を大切にしようとしてくれている。こんなの初めてなの。

太郎 私、たぶんこの人以上の人と巡り合うことなんてないと思うのよ。

太郎 駄目だ。
どうして。

太郎 明白だ。お前を車で轢いて、挙句その、婚前交渉をするような不届きものに娘はやれん。

ミヤ お兄ちゃんでしょ。それに、いまどき皆やってるわよ、その婚前交渉。

太郎 みんながやってたらしいのか。違うだろ。みんなが万引きしたらお前も万引きするのか。違うだろう。

ミヤ なんと言われようと、私はあの人に魅かれたの。

太郎 車にな。

ミヤ 人柄に。魅力があつたの。惹かれあつたの。

太郎 駄目だ。

ミヤ どうして。

太郎 親父とおふくろが死んでからは俺がお前の親代わりだ。お前になんと言われようと結婚は認めない。

おい。どこに行くんだ。

代わりになつて頂戴なんて、一度も頼んでない。

そういうつもりじゃない。

ミヤ、捌ける。

君、何を話した。

なにつて。

ミヤさんに何を。

あの。

なんだ。

なんですか。これ。

なんだろうな。

僕は、ただ世間話を…。

じゃあ、言ってくる。

ああ。気を付けて。

あと、君。

はい。

悪かった。

え。

あとは頼んだ。

太郎 捌ける。二人きりにされるトモとマツ。

トモ この後僕はそこから入ってきて。

マツ どうした。

トモ どれから聞いたらしいのか。

マツ ゆっくり考えたら。お水は。

トモ ください。

アヤが入ってくる。

トモ すごく、見覚えがある。というか、一昨日と同じというか。その。

マツ そうだよ。その通りだよ。あつてる。

トモ でもどこか違うような。その、どことは言えないけど。何か。

マツ 君がいたからね。一昨日、君はここに居なかつた。ずれたね。

トモ ずれた。

マツ ああ、大きく。

トモ ずれたつて何が。

アヤ ミヤちゃん、どうかしたんですか。

マツ 大丈夫君は気にしないで。

アヤ 除け者。
マツ そういうわけじゃ…。
トモ 同じことを繰り返していた。
アヤ それはいつものこと。
トモ へ。
マツ 大丈夫、少し早くなっただけだから。
アヤ 昨日私が来たから、お弁当作ってきたから。
マツ ちがう。
アヤ 太郎さんに嫌われたら私どうしよう。
マツ 君のことを愛しているんだ。大丈夫。気にしないで。ね。
アヤ 本当に私のせいじゃないですか。
マツ もちろん。
アヤ じゃああなたのせい。
トモ え。

アヤ、トモから松葉づえをとり、ぐりぐりと。

アヤ これは私と太郎さんの秘密だから。あなたなんかには暴かせないんだから。
トモ 痛い。先生ちよつと先生。
マツ アヤさん。

マツ、アヤから松葉づえを取り返す。

マツ 落ち着いて。ね。
アヤ 先生、太郎さんがこいつのせいで。
マツ ちがうよ、きつとアイツも疲れてたんだ。だから手順を間違えたんだ。
アヤ 太郎さん疲れてるの…。
マツ ああ、だから家に帰って、彼の帰りを待つんだ。ね？
アヤ はい、そうします。そうすれば私、嫌われない？
マツ もちろん。
アヤ ありがとう、先生。

アヤ、松葉づえをトモに返す。

アヤ ごめんなさい。私の早とちりで。
マツ 良いんだ。
アヤ さようなら、先生。
マツ ああ。

アヤ、捌ける。

トモ やばいよ。あのこ。やばいよ。
マツ まだまともさ。
トモ なあ。先生。
マツ なんだい。
トモ ここは病院だよな。
マツ そうだよ。
トモ 喫茶店。
マツ そうだよ。
トモ どっち。
マツ どっちでもいいさ。
トモ え。

マツ アヤさんがいるから。先生と呼ばれるから、僕はまだ医者でいられる。
トモ ミヤさんがマスターと呼び、ここを喫茶店とするなら。僕はマスターになろう。
マツ …。
トモ どうかしたのかい。
マツ きもちわるいような。
マツ 横になるかい。

トモ、その場に座る。

トモ 結構。先生。教えてください。ミヤさんは、太郎さんはいったい何者なんですか。
マツ 人だよ。
トモ 母に、好きな女は守ってあげなきゃいけない。そんなようなことを言われたことがあるんです。
マツ いつ。
トモ 幼稚園。
マツ そんな昔のことは忘れるんだ。
トモ そんな。
マツ 君は弟の置き土産に付き合う必要はないからね。
トモ 置き土産。
マツ 何でもないよ。どうぞ。

トモ、マツの汲んだ水を飲む。

マツ 夢だよ。夢。昔のことも、今起きたこともきつと夢なんだ。
トモ 夢。
マツ 横になるかい？
トモ はい、少し、眠いような。
マツ お休み、トモ君。
トモ おやすみなさい。

トモは、ゆっくりと眠りにつく。ミヤが入ってくる。現、夢を行き来している。

ミヤ おきて。風邪ひくわよ。
トモ うん。
ミヤ どうしたの？
トモ あれ、いや。何でもない。
ミヤ ねえ。どんな夢を見てたの。
トモ 夢。そうか。夢だったのか。
ミヤ どんな夢。
トモ バイクで転んで入院した夢。
ミヤ それは夢じゃないみたいね。
トモ え。あ。ほんとだ。
ミヤ そうね。
トモ 俺、おねえさんが好きなのかな。
ミヤ え？
トモ それともおねえさんの秘密が好きなのかな。
ミヤ 秘密。
トモ そう、秘密。
ミヤ 秘密なんてないわよ。
トモ じゃあ、付き合っつてよ。
ミヤ 良いわよ。
トモ 本当！やっつたー！
ミヤ じゃあ、キスしようか。

ミヤ、クラウチング体制。

トモ する。…キスするんだよね。

ミヤ そうよ。

トモ なんで。

ミヤ 早く、一緒に。

トモ いや、その。

ミヤ 何よ。はつきり言いなさいよ。

トモ 折れてるから、足。その体制はきついなあ。

ミヤ じゃあどうやってキスするのよ。

トモ 普通に。

ミヤ あー。はいはい。遊びね。

トモ 遊びじゃないよ。

ミヤ 男ってみんなそういうのよ。

トモ 待って待って。用意があるから。

ミヤ、セット。

トモ 待って待って待って。

ミヤ 待たない。

トモ どん！

ミヤ、走って消える。その時、トモが誤って松葉づえを落とす。

トモ わあ。

トモ、松葉づえを拾う。

トモ

あれ…。夢。キスできなかった。この足め。痛い。覚めない。
じゃあ、今は現実。じゃあ。さっきのは。夢。

トモ、ミヤの部屋へと歩みを決める。アヤ、入ってくる。太郎たちの家。アヤは花占をしている。

アヤ

帰ってくる。帰ってこない。帰ってくる。やった。

ごみ箱に、花を捨て入れ、また別の花を使う。

アヤ

夢、夢じゃない。夢。夢じゃない。夢。

夢で終わってしまう。

アヤ

夢…。

夢じゃないよ。ただいま

アヤ お帰りなさい、あなた。

太郎 ああ。

アヤ おまえ。

太郎 おまえ。

アヤ お疲れでしょう。お風呂、わいてますよ。

太郎 いや、明日の朝にする。

アヤ はい。じゃあ、ご飯。

太郎 食べてきたから。

太郎

アヤ
太郎
アヤ
じゃあ、
水、くれないか。
ええ。

太郎、アヤからもらった水を使いもらった錠剤を飲む。

アヤ
太郎
アヤ
アヤ
太郎
アヤ
アヤ
アヤ
アヤ
アヤ
アヤ
アヤ
どこか悪いの？
いや、先生から疲れてるならこれを飲めばいいって。
やっぱり疲れてるのね。
大丈夫。大丈夫だから。
先生も言ってたから。
先生が。
太郎さん疲れてるから、家で待っててあげなさいって。だから、待ってたのよ。私。
ありがとう。
だって大切な秘密だもの。

太郎、ゆつくりと、伸びをする。

アヤ
太郎
少し休みますか。
うん。

ひざまくらになろうかというところ。太郎は自らそれをひざまくらではなくする。
アヤはゆつくりとおでこに手を当てる。その手を握る形になる。

太郎
アヤ
ひんやりしてて気持ち良い。
ありがとう。
もう少し、
はい。今日は？
ミヤの所に行くのは夜だから、まだ時間ある。でも少し疲れたよ、30分でもいいから眠りたいんだ。
忙しい。
ああ、忙しい、
あしたもお仕事はお休みですものね。
どうして。
あなた、私を殺したでしょう。
すまない。
良いんですよ。
本当にすまないそういうつもりじゃなかったんだ。
これも秘密にしましょう。
秘密に。
ええ。私は死んだことにしないと。見つかったら大変なもの。
本当に
知っていますから謝らないで。私、うれしいのよ。
何がだい。
また、二人の秘密が増えたんですもの。

太郎、手を離す。胸の位置で手を組む。

アヤ
太郎
アヤ
太郎
アヤ
明日はご飯どうしましょうか。
アヤが作った物ならなんだっておいしいさ。
本当。
もう少しこのまま。
眠りますか。

太郎 ああ。深く、眠りたい。

アヤ、少し歌う。太郎の肩をゆっくりと叩きながらゆっくりとしばらくして。太郎の手がずりりと抜ける。テンポを落としながらもゆっくりとうたう。アヤ、おでこに乗せていた手を外し、寝顔を見て満足そうに手の甲でおでこをゆっくり押す。アヤが身にまとっていたカーディガン太郎にかける。静かに起こさぬように立ち上がり、ゆっくりと歩き電気を消そうとする。太郎が、寝返りを打つ、カーディガンが静かに落ちる。そのカーディガンを拾おうとアヤが近づく。

太郎 ミヤ、なんで結婚なんか。

アヤ、カーディガンを拾い上げ、

アヤ これも秘密。

太郎何かを感じ目が覚める。

太郎 秘密。秘密なんだ。行かなきゃもう。

アヤ どれくらい寝てた。

太郎 1時間ほど。

アヤ まずい。

太郎

太郎カルテを開く。

アヤ 字がたくさん。

太郎 なんで起こしてくれなかったんだ。

アヤ 気持ちよさそうに眠っていたから。

太郎 クソ、

アヤ どこへ、

太郎 ミヤの病室に行かなきゃならない。

アヤ どうして、

太郎 秘密を守るためだ。

アヤ 秘密なら守れるわ。

太郎 俺とミヤの秘密だ、お前は関係ない。

太郎

太郎、勢いよく捌ける。

アヤ 守れるもの。二人の秘密だって言ったじゃない。私にも守らせて。好きなの、太郎さんが。ねえ。ねえってば、ねえ。

アヤ捌ける。場転。ミヤの部屋。

ミヤ ただいま。

シゲ お帰りミヤ。お兄さんにはうまく話せた？

ミヤ それがね、おこっちゃった。

シゲ まあ、頭ごなしに否定されたら怒りたくもなるよね。

ミヤ 見てたの。

シゲ 聞いたんだ。

ミヤ 誰から。ちよっと。

シゲ ミヤからだよ。

ミヤ 私から？
シゲ 覚えてないの。
ミヤ ううん。そうね、一度話したもね。そう。
シゲ 何回も。耳にタコができたよ。
ミヤ そうだったわね。
シゲ ミヤ、その水槽、
ミヤ あら、
シゲ 水、変えてあげてほしいな。
ミヤ うん。
シゲ ねえ。
ミヤ 何。
シゲ この魚、何て名前にしようか。

シゲ ミヤ、立ち上がり、シゲを押す。が、シゲのフィジカルに負け、自身で倒れる。
シゲ どうしたの。
ミヤ 何でもない、発作かしら。
シゲ 物を突き飛ばしたくなる発作？
ミヤ そうそう。発作。

トモ トモ、ゆっくり入ってくる。
シゲ 大丈夫ですか。どだんっていいましたけど。
ミヤ 親近感。
トモ バイト君。大丈夫で少し転んじやって。
トモ ごめんなさい勝手に入ってきちゃって。どうぞ、

ミヤ トモ、ミヤに手を貸す。
トモ いや、折れてるんでしょう？
ミヤ 飾りみたいなもんですよ。痛みも、もう、ないし。
トモ じゃあ、お言葉に甘えて。

トモ トモ、ミヤを引き上げる。
ミヤ 軽い。
トモ どうしてバイト君がここに？
トモ トモです。
ミヤ トモ君ね、トモ君。どうして？
トモ いや、確かめたいことがあって。
ミヤ 確かめたいこと。
トモ あれは夢でしょうか。
ミヤ 夢。
トモ ミヤさん気を悪くしないでください。僕と付き合ってください。
トモ ごめんなさい。
トモ じゃああれは夢だ。じゃあ、あれは夢じゃない。
ミヤ 私、結婚するの。
トモ 知っています、義則さんですよね。
シゲ うん。私の恋人。
トモ 婚約者。
ミヤ 婚約者。
トモ まあ。

トモ かつこ良いんですか。
ミヤ もちろん。

トモ そっかぁ。お仕事は何されてるんですか。
ミヤ お医者様よ。かつこいいでしょ。

トモ そうですね、ここならたくさん居ますし。
シゲ しいっ。

トモ いつ結婚されるんですか。
ミヤ それがね、お兄ちゃんに反対されちゃって。
トモ あぁ、

トモ そう、お兄ちゃんには感謝してるの。親代わりだなんて言うけど、本当にその通り。頼もしいお兄ちゃん。でもね、それじゃあいけないと思うのよ。

トモ どうして。
ミヤ だって、私がずっとお兄ちゃんにべったりじゃあ、お兄ちゃんが行送れちゃうじゃない。
トモ え、

シゲ しいっ！
ミヤ だから私ね、お兄ちゃん以外に頼れる人見つけたから安心して結婚してねって言ってあげたいの。
トモ へえ。

トモ どう。
ミヤ え？

トモ お兄ちゃんに、そう伝えようと思って。
ミヤ 良いんじゃないですかね。喜びますよ。お兄さん。

トモ ありがとう。トモ君。
トモ あ、覚えてくれた。

トモ うん。
ミヤ じゃあ、おやすみなさい。
トモ おやすみなさい。

トモ、捌ける。ミヤ、ゆつくりと電話をかける。
ミヤ …でないなあ。

マツ そうだな、17時に仕事終わるから。
ミヤ うん。わかった。待ってる。
マツ ああ。

マツ、捌けていなくなる。ミヤは大喜びで電話をかける。

ミヤ ねえ、義則さん。義則さんに紹介したい人がいるの。
何度も話したでしょう。私の義兄さん。だから、明日のディナー、3人で。どうかな。
本当？ありがとう。

シゲ、電話線をゆっくり持ち上げるとその先は何もついていない。どこにもつながっていない。

ミヤ 楽しみねえ。

ミヤが捌ける。

シゲ 先生だよ。先生。

シゲはゆっくりと捌ける。
それとすれ違うように男二人が入ってくる。

太郎 先生。
マツ 太郎、しっかりしてくれよ。
太郎 ミヤは、ミヤは。
マツ 大丈夫だ、大丈夫だ。
太郎 ああ、よかった。どうやって。
マツ これで。
太郎 そうか、ああ、俺のフリを。
マツ これでわかったこともある。どうにかごまかしも効くみたいだな。
太郎 そうだな、ああ本当によかった。
マツ 今日は、家に帰って休むといいさ。時たま僕がやっておくから。
太郎 良いのか。
マツ ミヤちゃんに、兄と慕われるのも、悪くないなあと。そう思ったんだ、少しだけ。
太郎 すまない。
マツ 久しぶりに聞いたよ。

トモ、出てくる。

トモ あ。
マツ どうしたんだい。
トモ いえ、おやすみなさい。
マツ 夢だよ。
トモ え。
マツ 全部夢だ。
トモ ；。夢じゃなかった。
マツ 体が大きいと、薬の効きも弱いみたいだね。今日は発見の連続だ。

アヤ、あわてて入ってくる。

アヤ 太郎さんごめんなさい。そんなつもりなかったの。
太郎 ああ、いいんだ。
アヤ いいの。

太郎 大丈夫。ちゃんとちゃんと。
アヤ よかった。ね？太郎さん。私守ったわ。
太郎 そうだな。
アヤ 私、すごい。
太郎 ああ、アヤのおかげだよ。
アヤ ありがとう。太郎さん。

トモ、はけようとする。

マツ なあ、君。
トモ はい。
マツ 夢だよね。
トモ はい、夢でした。

トモ、捌ける。

マツ 明日も僕が代ろうか。
アヤ 代る。
マツ 僕が、太郎の代わりに、ミヤさんを見てあげることから。
アヤ 良いんですか。
マツ ああ。
太郎 いや、明日は、明日は絶対に俺にやらせてくれ。
アヤ 明日も私一人ぼっちなの。
太郎 アヤ、わかってくれ。
アヤ そうね、太郎さんがそういうんだもの。そうした方が良いに決まってるわ。
マツ 二人とも、無理だけはしないでくれ、僕はいつでも二人の味方だからね。
アヤ ありがとうございます先生。

太郎、アヤ、捌ける。

マツ 先生、マスター、お兄さん、一つ増えてしまったなあ。

マツ、カルテを開きながら、椅子に腰かける。

マツ 先生、マスター、お兄さん、先生、

トモが入ってくる。翌朝。

先生。

どうしたんだい。

あれは夢でした。それを前提に確認したいことが。

どうぞ。

ミヤさんは、ずっと繰り返しているんですか。

そうだね。

どうして。

それは言いたくないな。

婚約者がいるって。

そうだ。

トモ プロポーズされて、お兄さんに反対されて、そのあと、喫茶店で落ち合って、迎えに行つて、そのあとは。

マツ そのあとに、またプロポーズされて、お兄さんに反対されて、喫茶店で落ち合つて
トモ 先生。

マツ なんない。
トモ どうして
マツ 何が、
トモ どうしてみんな付き合ってるんですか。そんな気が違えたようなこと。
マツ ミヤさんの為だ。
トモ …。
マツ 彼女は、そうしないと、壊れてしまうんだよ。
トモ どうして、
マツ どうしてだろうね。
トモ 義則さんは、もう死んでる。

マツ、トモの松葉杖を蹴飛ばす。

マツ 二度というな、そんなこと。弟は、ミヤの中で生き続けている。

トモは、松葉杖を拾おうと、その方向へ。

マツ 二度というな。
トモ でも、
マツ なんない。

僕はミヤさんを救いたい。

僕も、太郎も救ってるじゃないか。

ループすることが良いことだとは思えないんです。

君にはそうだとしても、ミヤさんには

ミヤさんにこそ、いいことだとは思えない。

そうは思わない。
なぜ、

そうすれば、弟は、永遠にミヤさんの中で死ぬことなく生きていける。

とすればだ、ミヤさんが心を深く傷つけずにずっと幸せの中で生きていけるんだ。

ミヤさんは幸せ。

そうだ、幸せな時間を永遠とループしてるんだ。

幸せって、不幸が無いとおいしくないと、僕は思うんです。

そんなはずあるか。幸せはずっと続いた方が良いんだよ。

それに、

それに。

ミヤさんの中に生き続ける人を求めているのはきつと先生だ。

そんなことはないよ。

ある。

ない。

弟さんの話を、ミヤさんから聞き続けたいだけなんだあなたは。ミヤさんの中で永遠に死なない

義則という弟を、あなたは求めてるんだ。

ちがうよ。

僕の言っていることは正しい。ループはやめるべきだ。あなたも。

僕はループなんかしていない。君の考えは間違えてる。

ミヤ、入ってくる。

ミヤ あ、トモ君こんにちは。

トモ こんにちは。

マツ この子は、トモ君じゃないよ。

トモ え。

ミヤ そうだったかしら。義兄さんがそういうなら、そうね。

マツ お兄さん。何言ってるんだい。僕はマスターだよ。
ミヤ そうよね、私間違えちゃって。恥ずかしい。

トモ、椅子に座る。

ミヤ ねえ、マスター聞いて。昨日ね電話したの。
マツ 誰に。
ミヤ 義則さんに。
マツ そう、そうなんだ。それで。
ミヤ あれ、私なんて言われたのかしら。
マツ え？
ミヤ すごく、うれしかったのよ。義則さんに何を言われてうれしかったのかしら。
マツ 待って。なんで私うれしかったのよ。
ミヤ

マツ、トモにカルテを渡す。

読め。

マツ

いや、

マツ 良いから。君の間違えに気付かせてやる。

トモ おい、ミヤお待たせ。

ミヤ 誰。

トモ おいおい、お兄さんの顔も忘れたのか？

ミヤ 誰。

マツ 君のお兄さんじゃないか。

ミヤ そう。そうよね。お兄ちゃん、ごめんなさい。考え事してたものだから。

マツ えー。約束の時間は18時だろう。早いくらいだ。

ミヤ え？

マツ おいバカ。

トモ だってえ。

マツ ほら、二人とも予定があるんだろう。

ミヤ あ、そうよ、早く行かなきゃ。

トモ ミヤさん

トモ、連れて行かれる。

マツ 頼んだぞ。そのまま、そのまま。

マツも捌けてゆく。そこに太郎が入ってくる。

太郎 居ない。どこに行ったんだ二人とも。ミヤ。おい。マスター。マスター。先生。先生ってば。

アヤ入ってくる

アヤ 誰もいない。

太郎 どこに行ったんだろう。

アヤ 今日は義則さんと会う日なんでしょう。

太郎 そのはず。そのはずなんだ。先生もミヤもいない。

太郎、ふと気づき、戻ってきた道に戻る。

アヤ 太郎さん。

太郎 ずれたんだ。また、だからまた先生が俺の代わりになったのかもしれない。
アヤ それじゃあ、
太郎 まずい。非常にまずい。
アヤ 秘密、公開しちゃう。
太郎 公開なんかじゃない。暴露だ。ばれる。
アヤ ばれたらどうなるの。
太郎 考えたくもない。
アヤ 太郎さん、私秘密は絶対に守れるの。

アヤ、動く。

どこへ。

太郎 ミヤさんの病室に。

アヤ いや、俺が行く。

太郎 じゃあ、

アヤ アヤは先生の部屋に、

アヤ わかったわ。

アヤ、捌けていく。

太郎 先生。秘密が秘密が。

太郎、アヤと反対方向へ。そこへトモと、ミヤがやってくる。マツは後ろをついてくる。

ミヤ 義則さん、どうしたのかしら。

トモ するかあ、やくそくに遅れるなんて。とんでもない、なんでもない。

ミヤ 大体お兄ちゃんが遅れるから。

トモ どうしました。

ミヤ 遅れてないわ。お兄ちゃんは。あれ、どうしたのかしら。

トモ ここってどこですか。

マツ 駅前。

トモ いや、そうじゃなくて。

マツ 僕の部屋だ。

トモ 先生の。

マツ 診療室だ。

トモ ここが駅前。

マツ ここが駅前。

トモ 彼女の中では。

マツ ミヤさんここは、

トモ いい加減にしろ。

マツ だって、ここに書いてあること出てこなくなっちゃって。

ミヤ 義則さん、15分前には必ず来てくれるのに。

トモ ミヤは、義則のことを話してくれる。生き続けてるんだよ。
でも。

アヤがやってくる。

アヤ 先生。あ。

トモ しーっ。

アヤ あ。

アヤ あなたが邪魔したのね。やっぱり、これだから男は。
トモ ちがうよ、彼には手伝ってもらったんだ。

アヤ え。

マツ ミヤさんが、どんどん早くなつていく。ループが大きくずれたんだ。
アヤ ずれたのは彼のせい？

マツ ちがう。ミヤさんがずらしてるんだ。
アヤ どうして？

マツ それはわからない。でも、そこを助けてくれたのは彼だ。
アヤ どうやって？

今、ミヤさんには彼が太郎に見えてる。

アヤ そんなの嫌。

言ってる場合じゃなかったんだ。

マツ 太郎さんはそんなに大きくないし、足だつておつたことないし、第一
アヤ なに、

そんなに不細工じゃないわ。

トモ なんだと。

アヤ ごめんなさい。嘘をつくのが苦手なの。太郎さんと一緒にね。
トモ ねえ。

…。何？

誰と話しているの？

アヤ 私とよ。

トモ アヤさんと。

ミヤ だあれ。それ。私には何も見えないわ。行きましょう。

アヤ 私が代りになる。太郎さんの。

ミヤ ミヤさん。

あら、マスター居たの。

ほらお兄さんを連れて来たよ。

え。

太郎だよ。

そこには誰も居ないじゃない。

ミヤ 捌けていく。アヤ、その場に立ち尽くす。

マツ トモ君、ミヤさんを追いかけて。
トモ でも、

マツ 良いから。

トモ、捌ける。

マツ アヤさん。アヤさん…。君はここに居るんだ。僕は二人を追いかけるから。
アヤ ごめんなさい。ごめんなさい。

アヤ、マツをつかむ。

マツ 離して。

アヤ 駄目！

アヤ、マツを思い切り押す。マツ倒れる。そこに追い打ちで踏みつけるアヤ。

アヤ 先生、先生。…。ごめんなさい。先生。

アヤ、捌けていく。

マツ アヤさん、ちょっと。今のは痛い。

マツ、捌けていく。
太郎が入ってくることによりミヤの病室となる。

太郎 まだ時間あるな。よし、よし。

太郎、カルテを読み返す。シゲが入ってくる。

シゲ あ、太郎だ。元気。
太郎 どうした、シゲ、元気ないな。
シゲ なんだか眠いんだよ。
太郎 これ、魚にも効くのかな。
シゲ なに、エサくれるの。
太郎 ただのビタミン剤だよ。
シゲ なあ、太郎。
太郎 どうした。ほしいのか。ほれ、

太郎、水槽にカプセルを入れる。

シゲ ミヤが毎日僕に言うんだ。プロポーズされた。怒られた。死んじゃった、プロポーズされたって。
太郎 こっちだよ俺のこと見てどうするんだ。
シゲ 毎日夢のように喜んで悪夢のように泣きじゃくって。僕に笑いかけてくれるんだ。
太郎 ここ。ここ。
シゲ それにここ最近僕になりたいって。
太郎 ああ、もうじれったい。

太郎、ビタミン剤をもう2つほど入れる。

シゲ 僕になってどうするつもりなんだろう。こんなちっぽけな水槽に閉じ込められて同じとこグルグル回
太郎 つて。生まれてからずっとこの水槽で。楽しいのかな。
シゲ パクパクって、ほら。
太郎 パクパク口を開閉して、同じとこを回るだけ。それってもう、僕と何も変わらないんじゃないかな。
シゲ 早く食べろよ。ほらあ。
太郎 ミヤと僕の違いつてなんだろう。一緒だよね。
シゲ ちがう。
太郎 ちがうの？
シゲ これだって。
太郎

シゲ、太郎に直接、薬を渡す。

シゲ なにこれ。
太郎 そう、そのままのまま。
シゲ あれ、たくさんある。
太郎 食いつけ。
シゲ あっ。

シゲが水槽に手を入れると、水槽はみるみると変色してく。シゲはそれを見て水面を揺らす。

シゲ なにこれ、苦しいよ。太郎。
太郎 お、元気になった、ほらほら。
シゲ あ、眠くなってきた。
太郎 元気になれよ。

シゲ、あおむけに寝転ぶ。

太郎
おなかに向けて。

ミヤ、そこに入ってくる。太郎、できる限り存在を消す。

ミヤ
どうしたのかしら。

トモ
知らないですよ、約束すっぽかすなんてやっぱりろくでもない。
もとはと言えはお兄ちゃんが遅れるから。

トモ
約束の場所についたのは18時ぴったりじゃないか。

ミヤ
ちよっと遅れたくらいで。

トモ
ちよっと、つてどれくらいだろう。

ミヤ
そんなに待ってないわよ。

トモ
そうなんですよねえ。あ。

ミヤ
何やお兄ちゃん。

トモ
ちよっと、向こう観て。

トモ、太郎と入れ替わる。

ミヤ
ねえ。

太郎
…。せつかく仕事を切り上げてきたのに。踏んだり蹴ったりだ。

ミヤ
それは、ごめんね、お兄ちゃん。

太郎
いやいや、いいよ。

ミヤ
ご飯食べてく。

太郎
食べる。食べるぞー。

ミヤ
わかった。

ミヤ、捌ける。

太郎
なんでお前が。

トモ
僕が聞きたいです。もう、しどろもどろで、こんなこと続けて何になるんですか。

太郎
今までは君が僕の代わりをやったのかい。

トモ
そうです。先生にこれをもって。この通りにつて。

太郎
さすが先生だ。

トモ
でも、ここから先は何も書いてなくて。この後どうしたら、

太郎
大丈夫、この後は義則が死んでおしまいだ。

トモ
死ぬ。

太郎
ああ、車で高速でまっさかさま。地面に。

トモ
それじゃあ、

太郎
だから帰るぞ。

トモ
ミヤさんは、

アヤ、入ってくる。

アヤ
太郎さん。

太郎
先生は？

アヤ
やっつけた。

トモ
やっつけた？

太郎
よくやった。

アヤ
ね？わたし、約束守れるもの。

太郎
ありがとう。

トモ
太郎 この後どうするんですか。
よし帰ろう。

ミヤ、出てくる。

トモ 帰る。
ミヤ お兄ちゃんが、二人いる。
太郎 まずい。
トモ 僕ですよ。トモですよ。
ミヤ え。

太郎 俺がお兄ちゃんだぞ。

トモ ねえ。

太郎 ねえ。

トモ そうよね、トモ君どうしたの。

ミヤ 帰ろう。

太郎 もうついてきてたのね。みんなごめんね。義則さん忙しかったみたいでこれなかったの。

ミヤ そうなんだよ。なあ、

太郎 お兄ちゃん、焼き魚、もう少しでできるから。
帰ろう。

ミヤ 帰るの？食べていくんじゃないの。

太郎 ああ、そうだった。

マツ、よたよたと入ってくる。

マツ 良かった、太郎間に合ったんだな。
太郎 先生。

太郎、マツを押して帰る。

マツ 太郎どうしたんだ。

トモ、がそこで邪魔になる。

太郎 早くどけろ。
トモ 足怪我してるんだ、ちょっと待って。

アヤ、その場に入ってくる。

アヤ 太郎さんごめんなさい。
太郎 みんな帰ろう帰ろう。

電話が鳴る。ミヤにしか聞こえない。

ミヤ 義則さんかしら。

トモ 電話なんて。なってるない。

太郎 ああ、おしまいだ。

太郎。電話を奪う。ミヤはそれでもなお電話に食らいつく。

マツ おい太郎、乱暴は
太郎 頼む帰ってくれ、先生。帰ってくれ。
マツ え。

アヤ、マツの耳を急いでふさぐ。

アヤ だめ！ひみつ！

アヤ、マツの耳をふさぐ。が、途中ではがされる。

ミヤ はい。ええそうです…。嘘。そんな。だって昨日まで。昨日までこの電話で話してたんですよ。

義則さんに代わってください。早く。私は冷静です。冷静な人間は冷静だって自分で言うものです。だから私はいたって普通で大丈夫なんです。だから早く代わってください。義則さんは死んでなんかいないもの。私は大丈夫。大丈夫なんです。

マツ ループは。

はい。大丈夫です。今帰ってきました。また、行きたいですよ。もちろんです。

はい、おやすみなさい。はい。

マツ ループは死ぬとこまで続いているのか。

ちがうんだ。

太郎

マツ、持っているカルテを投げ捨てる。

太郎 ちがうんだ。

弟は今、ミヤの中で死んだ。

マツ 先生、聞いてくれ。これは。

ごめんなさい。太郎さん。

アヤ うるさい。お前は黙ってる。

どうしよう。嫌われちゃった。あなたが余計なことするから。

アヤ 僕が悪いの。

トモ

ミヤ、電話線が切れているのを発見してその場にたたずむ。

マツ ループは、ミヤさんが幸せなまま続くものじゃないのか。

そうだ。そうだ。

太郎 弟は死んだ。

でもすぐによみがえった。

マツ 何度繰り返したんだ。

ミヤは今幸せの絶頂にいる。好きな男性の相談を俺にする。

太郎 それに反対されて、それでも兄を愛しているが故の行動だと俺に懺悔する。

でも、そのあと、ミヤさんは絶望するんでしょう。

トモ ああ、そうだ。その絶望は計り知れない。だが、すぐさま幸せになる。

でも、

太郎 あの子は幸せな日々を繰り返しているだけなんだ。

もうやめだ。

マツ たのむ。先生、黙ってたことは謝る。でも。

断る。

太郎 人は二度死ぬ、肉体的な死と、精神的な死。お前が協力してくれないと先生の弟は二度目の死を迎

える。

マツ ミヤさんの中で、義則が生き続けてくれると、そう思ったんだ。

先生。

太郎 お前の妹は自分の意思で勝手に繰り返し、妄想の中で義則は何度死んだ。

数えたことはあるか。あるわけない。お前が心配なのは俺でも、義則でもなく。大好きな大好きな

妹に嫌われるかどうかだけだ。

その何が悪い。

太郎

マツ 悪くはない、でも僕はもう協力しない。
太郎 先生。
アヤ 先生お願い。太郎さんを助けてあげて。
マツ お似合いだよ。君たち。
アヤ 本当。
マツ 好きな人に好かれるようにするんじゃない。嫌われないようにする。気持ち悪い。ああ。気持ち悪い。

ミヤ、濁った水槽に近づく。

トモ ミヤさん、聞いてましたか。
ミヤ シゲ、いなくなっちゃった。
太郎 え。
ミヤ お兄ちゃんになんて電話しよう。
トモ 死んでる。

ミヤ、電話を取る。そこに行く道中、皆ミヤをよける。

ミヤ やっほー、お兄ちゃん。うん。元気だよ。ねえ。明日って時間あるかな。うん。できれば夜遅くない方がいいかな。お兄ちゃんに、大切な話があるの、とても、大切な話。お仕事何時に終わるの。わかった。じゃあ、18時に喫茶店で。うん。先に入って待ってるから。ばいばい。

アヤ、いなくなっている。太郎を追ったようだ。

ミヤ お兄ちゃん驚くだろうなあ。

ミヤ、シゲを見つめる。

ミヤ なんとか言つてよ。シゲ。どうしよう。ねえ、この後どうしよう。
太郎 ミヤ、お兄ちゃん驚いたよ。結婚だなんて。

ミヤ そう、私結婚するのよ。
太郎 相手は。

ミヤ お医者様。
太郎 そうか、名前は。

ミヤ 木村義則。よお兄ちゃん。
太郎 だれそれ。

ミヤ お医者様。
太郎 そうか、名前は。

ミヤ 木村義則。よお兄ちゃん。
太郎 誰それ。

ミヤ 俺の弟だ。
マツ 義兄さん。

ミヤ もう、無理だ。あきらめろ。
マツ 何を。

ミヤ 土台無理な話だ。死んでるんだから。弟は。
太郎 死んでなんかない。
アヤ そうよ。

ミヤ 義兄さん、何を言ってるの。
マツ 僕がマスターに見えないのかい。

ミヤ マスター、何言ってるのよ。マスターが義兄さんなわけないわよ。
マツ ああ、そうだ。
トモ ミヤさん。

ミヤ トモ君、どうしてここに。

マツ　ここは病院だからね。怪我をしたらみんなここに来るんだ。
ミヤ　そうよね、病院なんだからトモ君いて当たり前よね。ねえ、喫茶店のバイトって大変。
トモ　僕はバイトなんかしてない。
ミヤ　入院してるんだものね。あれ、お兄ちゃん。私どうして病院に居るの。
太郎　ちがうよ、ここはミヤの家だ。
アヤ　そう、ね、太郎さん。
太郎　うるさい。

太郎、すぎるアヤを置き去りにして。

アヤ　太郎さん。
太郎　ミヤ、兄ちゃんだけをみる。
ミヤ　痛いわよ、お兄ちゃん。
太郎　お前は、俺のかわいい妹だ。ここは、お前の家だ。
ミヤ　ちがうわ、お兄ちゃん。
太郎　親父とおふくろが死んでからは俺がお前の親だ。なあ、ここは家なんだ。いつも帰ってくる。お前を
ミヤ　迎え入れてくれる、暖かい家だ。
太郎　ちがう。
ミヤ　ミヤ。
太郎　だって。

太郎の腕をすりと抜けて、シゲによる。

ミヤ　ここにはシゲが居ないもの。
太郎　シゲならここに居るじゃないか。ほら、
トモ　え。
太郎　ほら。そっくりだ！大きいところなんかそっくりだ。
ミヤ　そっくりさんは偽物。
太郎　おい、アヤ。
アヤ　私、
太郎　全部お前のせいだ。お前が見なけりやお前と秘密さえ作らなきゃ。
アヤ　太郎さんに嫌われた。あなたのせいで。
ミヤ　あなたの声は聞こえないの。
アヤ　聞こえてるじゃない。
ミヤ　聞こえない。
アヤ　嘘つき。
ミヤ　奥様の声なんて聞こえない。
マツ　どうしてかわかるかい。
太郎　嫌だ。嫌だ。駄目だ、お兄ちゃんを頼るんだ。
アヤ　太郎さん、私がいるじゃない。私太郎さんがいないと、私がミヤになるから。
太郎　駄目だ。
アヤ　アヤ、ミヤ、ほらそっくり。
太郎　そっくりさんは。偽物。
アヤ　本物よ、私はミヤ。

太郎、駄目だ、とつぶやく。つぶやく。アヤ、私がいるわ、とつぶやく。つぶやく。

ミヤ　トモ君、教えて。
トモ　ミヤさんが望むなら。
ミヤ　義則さんは、
太郎　駄目だ。
アヤ　私がいるわ。

ミヤ 義則さんは、事故に遭ったのよね。あの日。

太郎 小さくなり、やだ、やだ、やだ、とつぶやく。アヤは、それを覆うように、抱きしめる。

トモ そして、
ミヤ 嫌、嫌。嫌。

ミヤ、電話をかける。

マツ どこにかけるんだい。

ミヤ 義則さんに、義則さんにかけてるの。

マツ ツー。ツー。

全員 ツー。

ミヤ 何も、聞こえない。

マツ どうしたらいいか、一緒に考えよう。

ミヤ 義則さんは、死んだ。

マツ 僕の弟は、死んだ。

トモ あなたの婚約者は、

ミヤ 死んだ。

ミヤ、その場に座り込み、散らばったカルテで頭を覆う。

ミヤ 死んでなんかない。義則さんは、義則さんは私と、私と義則さんは

太郎 ミヤ、大丈夫だ泣かないでくれ。兄ちゃんがいるから。な。

アヤ 太郎さん。

太郎 ミヤ、なあ。かわいいミヤ、お兄ちゃんに頼ってくれ。なあ。ミヤ。

アヤ、地面に散らばったカルテを拾い上げて、ミヤのまねをする。

アヤ 太郎さん、私も悲しいの。

太郎 ミヤ。

アヤ 太郎さん、

トモ やばいよ。こいつら、やっぱりやばいよ。

マツ やばいよ。やばくないよ。やばいよ。

ミヤ 私は魚になりたい、そんな映画あった、そんなような気がする。

トモ、片足をついて、クラウチングスタートのような体制でしゃがみこんでいる、ミヤを覗きこむ。

ミヤ 死んでなんかない。

マツ ミヤさん、顔をあげて。

トモ 僕は、あなたの秘密を知りたいと思ううちに、あなたを知りたいと思いました。

トモ、ミヤのカルテをゆつくりとはがしていく。ミヤ、死んでる、死んでない。とつぶやいている。

トモ やつとループから抜け出せたんです。一緒に退院しましょう。ミヤさん。

トモ、完全に、ミヤをカルテから取り出す。

ミヤ 死んでない。

トモ え。

ミヤ そうね、一緒に退院しましょう。義則さん。

太郎 え。

ミヤ 私、義則さんをずっと待ってたんだから。

トモ、ミヤに抱きつかれ、硬直。

太郎 お兄ちゃんは認めないぞ。
ミヤ 紹介するわ、お兄ちゃん。この人が義則さん。

トモと、マツは目を合わせたまま動けない。

マツ 夢なら覚めてくれ。
アヤ 太郎さん。

太郎は、アヤを押しつけて、ミヤと肩を組む。
声は聞こえていない。しかし、明かりが消えきらない。
マツと、トモだけを残して、三人は、くるくると部屋を動き回る。
ゆっくりとドアが閉められる。
暗転。

—幕—

あとがき

上演台本のご購入誠に有難うございます。
作・演出の NINI です。

今回の作品は、培養期間中(3年間)で私が感じた恐怖、嫉妬、幸せを凝縮した作品であります。毎回考えているのは「愛とはなんと美しいものだろうか。」ということなのです。

はたしてループすることが良いことなのでしょうか。私は良いことではないと断言します。停滞からは何も生まれませんし、苦しいことこの上ないでしょうから。

でも、ループすることは非常に楽です。毎日同じことをしていれば生きていけるのですから。矛盾しているけども、私はそう思うわけです。

どうか、作中に現れた哀れな彼らを愛してあげてください。それが唯一彼らの救いになると思います。そして、決して忘れないでください。ループした彼らを。

台本の販売は、遊戾坊クチナワ公演「ミドリイロ」以来二回目となります。自信を持っています。この作品は遊戾坊らしい作品です。

これからも、私たちを見守っていただけると、うれしいです。

NINI